のら犬

新美南吉

青空文庫

一

常念御坊は、碁がなによりもすきでした。きょうも、となり村の檀家へ法事でよばれてきて、お昼すぎから碁をうちつづけ、日がかげってきたので、びっくりしてこしをあげました。

「まあ、いいじゃありませんか。これからでは、とちゅうで夜になってしまいます。今夜は、とまっていらっしゃいましよ。」

と、ひきとめられました。

「でも、小僧がひとりで、さびしがりますから。さいわいに風もござい ませんので。」

と、おまんじゅうのつつみをもらって、かえっていきました。

常念御坊は歩きながらも、碁のことばかり、考えつづけていました。さっきのいちばんしまいの、あすこのあの手はまずかった。むこうがああきた、そこであすこをパチンとおさえた、それからこうきたから、こうにげたが、あれはやっぱり、こっちのところへ、こうわたるべきだったなどと、むちゅうになって、歩いてきました。そのうちに、その村のはずれに近い、烏帽子をつくる家の前まできますと、もう冬の日も、とっぷりくれかけてきました。

しばらくしてなんの気もなく、ふと、うしろをふりかえってみますと、じきうしろに、犬が一ぴきついてきています。きつね色の毛をした、耳のぴんとつったった、あばらの間のやせくぼんだ、ぶきみな、よろよろ犬です。どこかここいらの、かい犬だろうと思いながら、また碁のことを考えながらいきました。

一、二丁いって、またふりむいてみますと、さっきのやせ犬が、まだとぼとぼあとを追ってきています。うす暗いおうらいのまん中で、二、三人の子どもが、こまをまわしています。

「おい、坊。この犬はどこの犬だい。」

子どもたちは、こまを足でとめて、御坊の顔と犬とを見くらべながら、

「おらァ、知らねえ。」

「おいらも、知らねえ。」

といいました。

常念御坊は、村を出はずれました。左右は麦畑のひくい岡で、人っ子ひとりおりません。うしろを見ると、犬がまだついてきています。

「しっ」といって、にらみつけましたが、にげようともしません。足をあげて追うと、二、三尺ひきさがって、じっと顔を見ています。

「ちょっ、きみのわるいやつだな。」

常念御坊は、舌うちをして、歩きだしました。あたりはだんだんに、暗くなってきました。うしろには犬が、のそのそついてきているのが、見なくもわかっています。

すっかり夜になってから、峠の下の茶店のところまできました。まっ暗い峠を、足さぐりでこすのはあぶないので、茶店のばあさんに、ちょうちんをかりていこうと思いました。

おばあさんは、ふろをたいていました。ちょうちんだけかりるのも、へんなので、常念坊は、

「おい、おばあさん。だんごは、もうないかな。」

ときました。

「たった五くしのこっていますが。」

「それでいい。つつんでおくれ。」
「はいはい。」
と、おばあさんは、だんごを竹の皮につつみます。
「すまないが、わしに、ちょうちんをかしておくれんか。あした、正観にもってこさせるでな。」
「とても、やぶれぢょうちんでござんすよ。」
「いいとも。」
おばあさんは、だんごをわたすと、上へあがって、古ちょうちんのほこりをふきふき、もってきました。常念坊は、ちょうちんにあかりをつけると、あたりを見て、
「おや、もう、どっかへいったな。」
と、ひとりごとをいいました。
「おつれさまですかね。」
「いんにゃ。どこかの犬が、のこのこついてきて、はなれなかったんだよ。」
「きつねじゃありませんか。あなたの通っていらっしゃった、あのさきのやぶのところに、よくきつねが出て、人をばかすといいますよ。」
「おもしろくもないことを、いいなさんな。ほい、おあしをここへおくよ。」
常念坊はかた手におまんじゅうのつつみと、ちょうちんをさげ、かた手にだんごのつつみをもって、峠にかかりました。その峠をおりて、たんぼ道を十丁ばかりいくと、じぶんの寺です。
もう、あのいやな犬もついてこないので、安心して、てくてくあがっていきますと、やがてうしろのほうで、クンクンという声がします。
「おや、また、あの犬めがきたな。」
と、常念坊は思いました。
かまわず、どんどんいきましたが、ふと考えました。うしろからくるのは、犬ではなくて、おばあさんがいった、あのきつねがつけてきたのではなかろうか。こう思うと、じぶんのうしろには、ずるいきつねの目が、やみの中に、らんらんと光っているような気がします。気の小さな常念坊は、ぶるっと、身ぶるいをしました。
でも、うしろをふりむくのもこわいので、ぶきみななりに、ぐんぐん歩きました。なんだかうしろでは、きつねがいつのまにか女にばけていて、今にも、きゃっといって、とびついてきそうな気がします。
常念坊は、そのきつねのことを、わすれようわすれようとするように、ちょうちんのあかりばかりを、見つめて歩きました。

二

やっとのこと、村へきました。村へはいると、すこしほっとしました。村では、どこのうちも、よいから戸をしめてしまうので、どっこも、しいーんとしています。その中で、どこかのうちで、きぬたをうつ音が、とおくにきこえます。
そのとき、ふと気がついてみますと、左手にもっていた、だんごの竹の皮づつみが、いつのまにか、なくなっています。
「おや、しまった。うっかりして、落としたかな。それともきつねのやつが、そっと、ぬすみとってにげたかな。ちょっ。」

常念御坊はいまいましそうに、おまんじゅうのつつみと、ちょうちんとを両手にもちわけて、うしろをむいてみました。

もう、なにもおりません。やがて、寺の門の前にきました。立ちどまって、もう一ぺん、うしろをよく見ますと、きつねらしいものが、のこのこつけてきています。

常念坊は門をはいると、

「正観、正観。」

と、庫裡のほうへむかってどなりました。

「はい。」

とへんじがきこえて、正観が、ごそごそ鐘楼からおりてきました。

「おい。きつねだ、きつねだ。ほうきをもってこい、ほうきを。ほうきで追いまくれよ。」

正観はとんでいって、ほうきをもって、門のほうへかけつけました。

「おや。きつねがなにか、くわえていますよ。」

「ああ、だんごだ。とりあげろよ。」

「はい。下へおけ。——だんごは、とりかえしましたが、きつねはすわったきり、にげません。」

「だから、ほうきで追っぱらえというのに。」

「ちきしょう。にげんか。しっ、しっ、しっ。」

と、正観はほうきで追いまくりました。

「ほうい、ちきしょう。こらっ。」

と正観は、そっちこっち追いかけて、とうとう外へにがしてしまいました。

「にげたか。」

「にげました。」

「正観。」

「はい。」

「なんでおまえは、今ごろ鐘楼なんぞへ、あがっていたのだ。」

「さびしかったから。」

「鐘楼へあがってれば、さびしくなくなるのか。」

「鐘をゲンコツでたたくと、おん、おん、おんと、和尚さんの声みたいな音がするんです。」

「なにをいいおる。」

和尚さんは、ころもをぬいで、ろばたで、おぜんにすわって、ざぶざぶと、お茶づけをながしこみはじめました。正観は、おみやげのだんごを、ひろげました。

「和尚さん。あの犬は、どこからついてきたのです。」

「となり村から、しつっこく、あとをつけてきたのだよ。」

「どうして。」

「どうしてだか、知らないよ。」

「ばかしゃぁ、しませんでした?」

「おれがきつねなぞに、ばかされてたまるかい。」

「きつねですか、あれは。」

「……」

「犬みたいだったがな。そのしょうこに、正観はそばへよっても、ちっとも、こわくはなかったがなあ。」

常念御坊は、はしをおいて、考えこんでいました。あんどんのあかりが、そのくるくる頭へ赤くさしています。

しばらくして、常念御坊は、
「正観。」
と、すこし、きまりわるそうにいいました。
「そのちょうちんを、つけよ。」
「はい。」
「わしは、ちょっといって、さがしてくるでな。おまえは、本堂のえんの下へ、わらをどっさり、入れといてくれ。」
「なにをさがしに？」
「あの犬を、つれてくるんだ。」
「きつねでしょう、あれは。」
「かわいそうに。犬なら、のら犬だ。食いものも、ろくに食わんとみえて、ひどくやせこけていた。はるばる、となり村から、わしについてきたのだから、あったかくして、とめてやろうよ。」
それに、わしの落としただんごまで、ちゃんと、くわえてきてくれたんだもの。おれがわるいよと、これだけは心のなかでいって、常念御坊は、ちょうちんをもって、出ていきました。

青空文庫情報

底本：「新美南吉童話全集　第一巻　ごんぎつね」大日本図書
1960（昭和35）年6月20日初版発行
1978（昭和53）年7月31日34版発行
初出：「赤い鳥」
1932（昭和7）年5月号
※底本で括弧書きされている編集部注は削除しました。
入力：鈴木厚司
校正：佳代子
2004年2月18日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

のら犬

新美南吉

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/